Ⅰ学期の学校評価から考える～子どもたちが願う「楽しい学校」を、2学期の学校づくりへ～

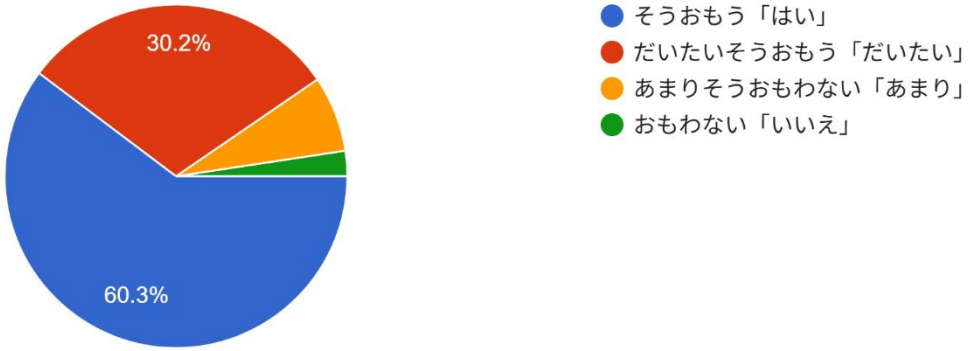
1． はじめに

Ⅰ学期の学校評価を、児童会役員の声・児童アンケート・職員自己評価の2つの視点から整理した。2つの資料を重ねると、子どもたちが考える「楽しい学校」は、イベントや行事の多い学校ではなく、安心して過ごせることを土台に、笑顔や協力が生まれる学校であることが見えてくる。また、Ⅰ学期はその土台づくりが着実に進んだ一方で、2学期に向けた課題も明らかとなった。本資料をもとに、子どもたちの願いを実現するために、私たちが2学期に何を大切にしていくのか、その手がかりを考えていきたい。

2. 児童アンケート（全校児童対象）

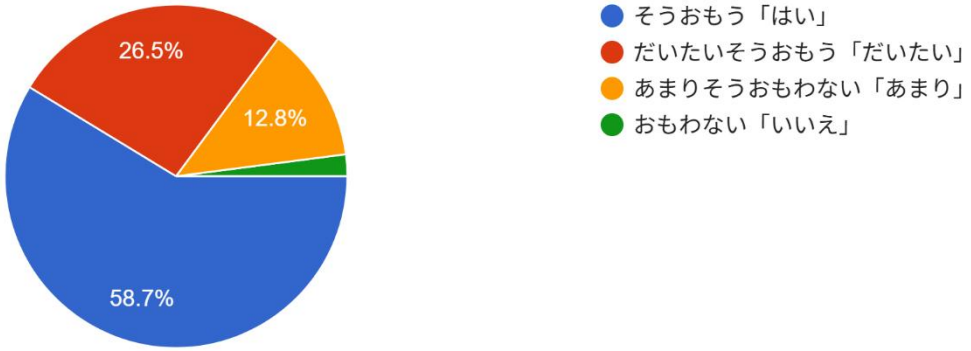
№１　学校（がっこう）は楽しく（たのしく）、安…　（せいかつ）を送る（おくる）ことができる

629 件の回答



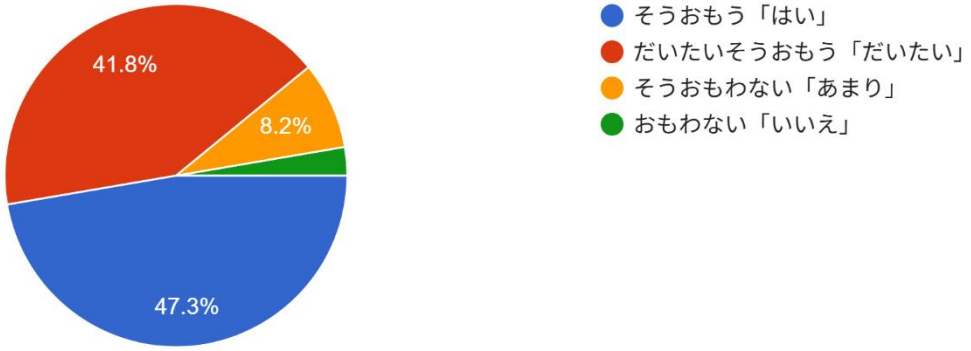
№２　体育（たいいく）の時間（じかん）や休み時…かしたり）、遊んだり（あそんだり）している。

634 件の回答



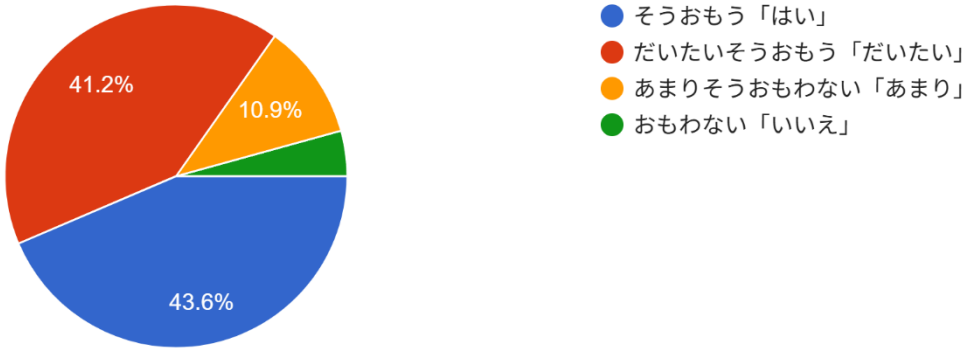
№３　授業（じゅぎょう）はわかりやすく、楽しい（たのしい）。

632 件の回答



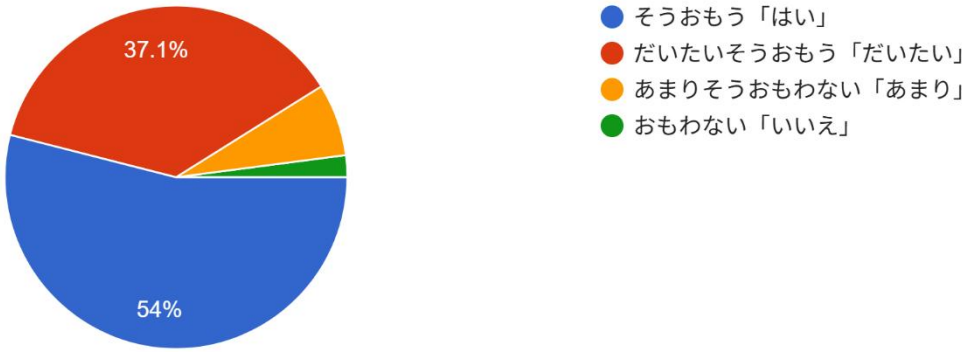
№４　決まった（きまった）時間（じかん）に宿...くて）いねいに書いたり（かいたり）している。

631 件の回答



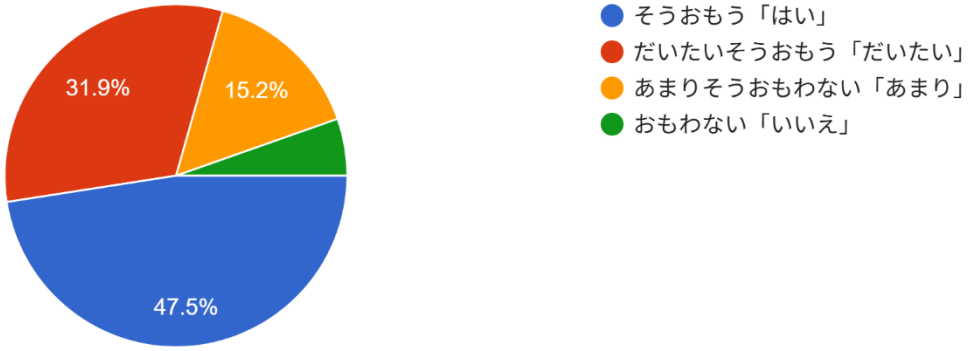
№５　声（こえ）の大きさに注意（ちゅうい）し...なし）をしっかり聞いたり（きいたり）できる。

630 件の回答



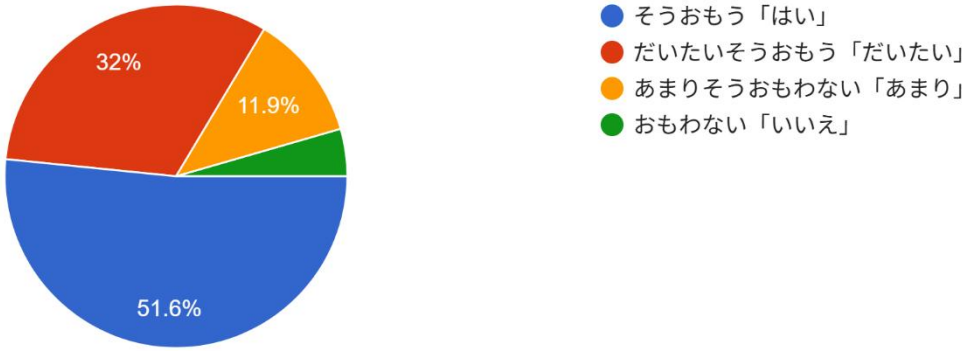
№６　授業中（じゅぎょうちゅう）、ともだちと相...）をともだちに伝えたり（つたえたり）できる。

631 件の回答



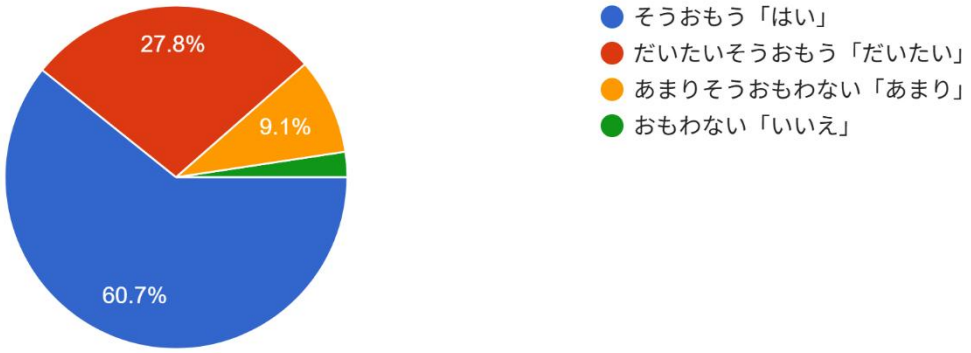
№７　元気（げんき）よく、明るい（あかるい）あいさつができる。

628 件の回答

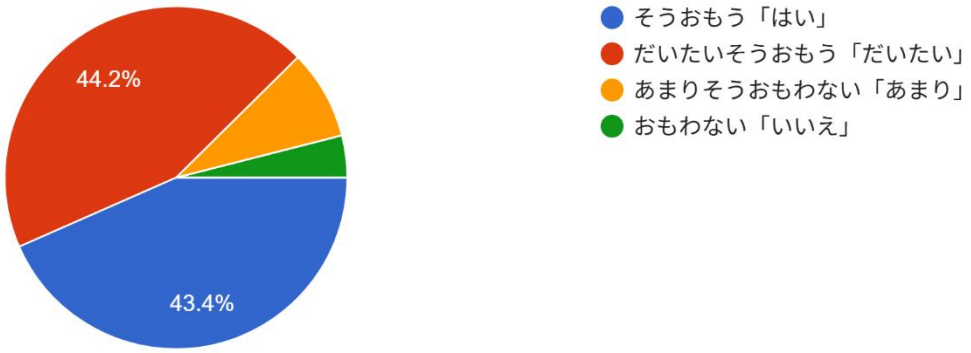


№８　なかよし学級（がっきゅう）との活動（か...しく（たのしく）活動（かつどう）が　できる。

629 件の回答



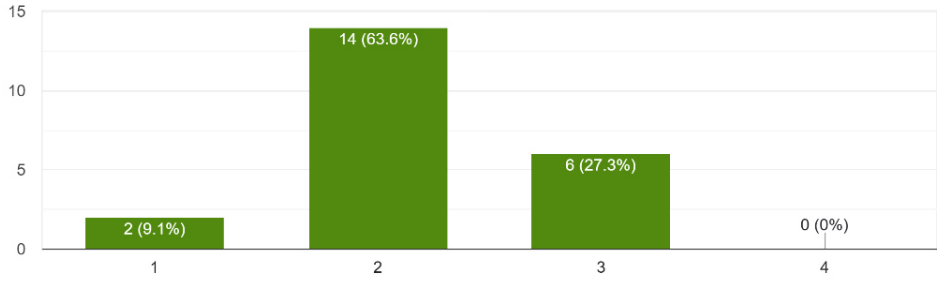
№９　だまって、最後（さいご）まで清掃（せいそう）にとりくんでいる。
629 件の回答



3. 職員自己評価

できている→１　どちらかと言えばできている→２ どちらかと言えばできていない→３　できていない→４　4段階で評価 成果・課題・改善策については可能な範囲で回答

重点目標①　他者と関わる力　生活科、総合、特別活動の充実（力を合わせる）
22 件の回答



【記述より】

・実態把握と計画的な指導：児童の実態を踏まえて自立活動を計画し、日常授業でも関係づくりを意識して指導した。

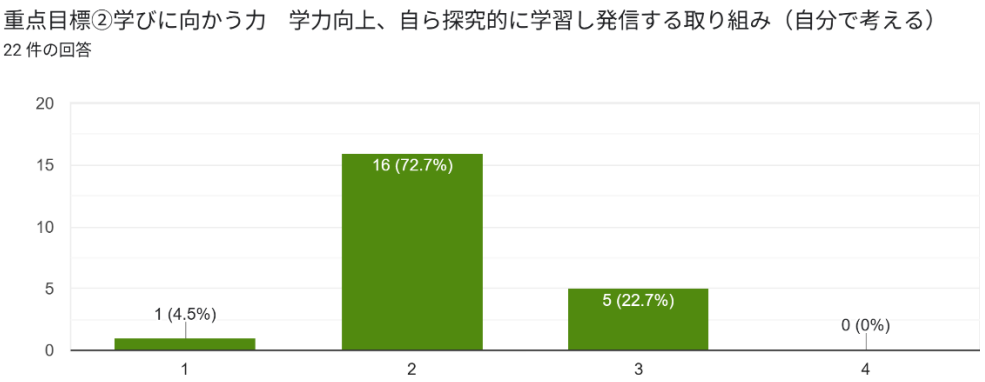
・日常生活での協力の姿：授業のペア・グループ活動や給食・清掃、飼育栽培活動などを通じて、助け合い・協力する姿が多く見られた。

・総合的な学習との連携：飼育栽培や地域交流、下級生への伝達活動などを通じて、協力心や責任感、他者への優しさを育んだ。

・発達段階に応じた課題：入学期は生活習慣の定着が優先で、他者との関わりは今後拡充が必要な学年がある。

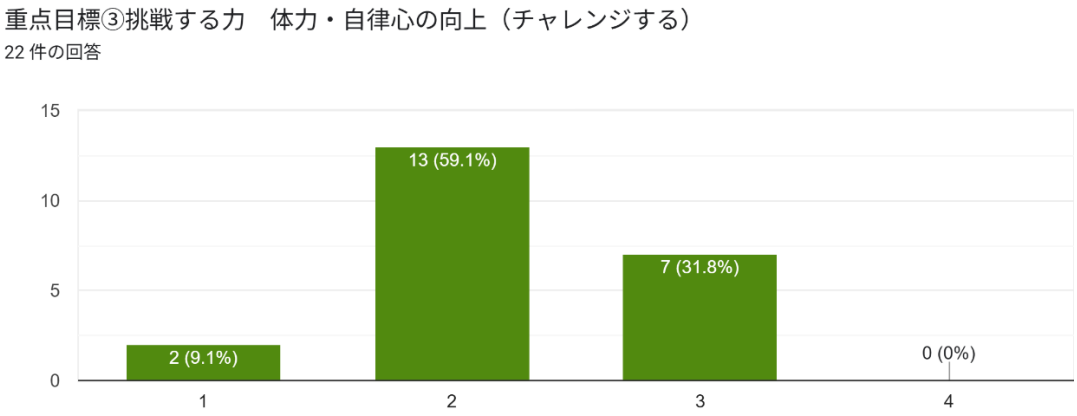
・指導時間の確保という課題：教科指導に追われ、関わり合いを重視した指導が十分にできなかった学年もあった。

・生活指導上の懸念：自分本位な言動や、命に関わる暴言など、日常的な指導が必要な児童が一部見られる。



【記述より】

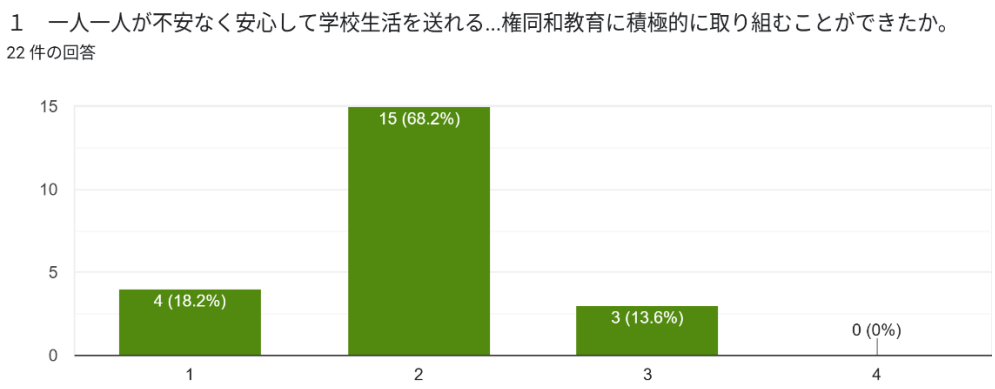
- **見通しを持たせる支援の効果**：学習の流れや見通しを分かりやすく示すことで、自分から学習に取り組む児童が増えた。
- **主体的に取り組む姿の広がり**：プリントの発展課題に自ら取り組む、問題を自作する、観察・予想を通じて自分で考えるなど、主体的な学びの姿が見られるようになった。
- **意欲・関心面の課題**：学習意欲や探究心が低い児童もおり、発問や課題づくりの工夫、基本的な学習態度(集中力・書く・聞く)の育成が引き続き課題。
- **個に応じた支援の工夫**：ヒント付き教材の作成など、学力に課題がある児童も自分の力で取り組めるよう配慮している。
- **学力向上と参加度の関係**：学力そのものの向上は道半ばだが、授業参加や前向きに課題に取り組む児童は増えており、日々の積み重ねを大切にしている。
- **発達段階をつなぐ難しさ**：低学年で育まれる主体性を高学年でどう伸ばすか難しさがあり、個の追究の時間確保を課題としている。



【記述より】

- **目標設定と達成感の積み重ね**：学期当初に目当てを決め、スモールステップや視覚的な工夫(カレンダー等)で達成感を持たせながら取り組んだ。
- **挑戦する姿勢の個人差**：新しいことに関心を持ち挑戦する子がいる一方、すぐに諦めてしまう児童も多く、小さな成長を褒めながら次につなげる指導をしている。
- **友だちと共に踏み出す挑戦**：一人では勇気が出なくても、友達と一緒なら挑戦できる児童の姿が見られた。
- **自律心の育成に関する課題**：自律的な行動は見られるものの、自発的な挑戦というより「義務を怠らない」指導の結果である面もあり、今後の課題。
- **行事を通した集団での達成**：運動会のダンスや練習に学年・学級で一丸となって取り組めた一方、学級独自の取組は十分にできなかった時期もあった。

・**環境要因による学習機会の制約**：天候不順による観察・実験機会の制限や、水泳の見学者が多いなど、活動の実施自体に課題が残った。



【記述より】

・**計画的な学習環境づくり**：スタートカリキュラムに沿った計画的な取組や、理科の活動パターン化、算数での具体物・プリント活用など、分かりやすい授業づくりに努めた。

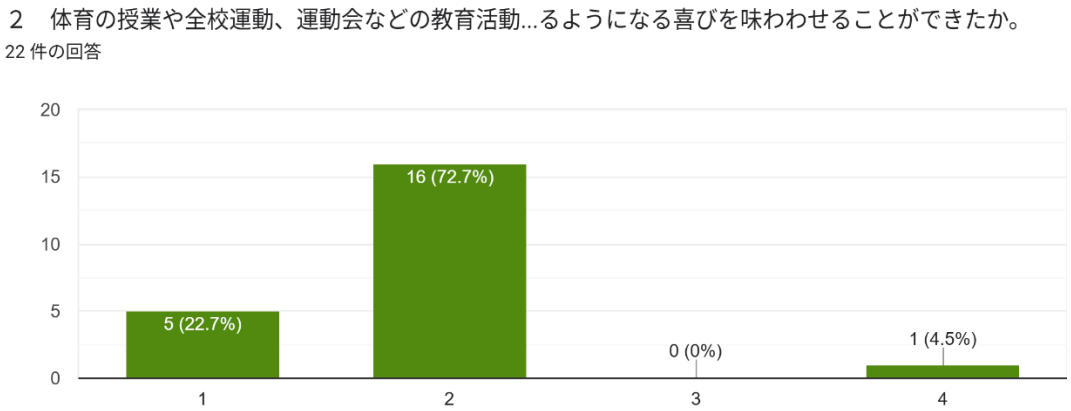
・**安心して過ごせる支援体制**：児童・保護者が不安なく学校生活を送れるよう対応し、個別に学習の受け方を相談・変更するなどの配慮を行った。

・**道徳指導の位置づけの課題**：道徳の授業は着実に実施しているものの、特に注力しているわけではなく、今後の課題として残る。

・**UD 化への期待と懸念**：学校の UD 化はどの子も学べる環境づくりに一定の効果がある一方、画一的な対応が特定の子を排除する危険性もあり、慎重に考える必要性を感じている。

・**支え合う学級づくりへの思い**：一人一人の違いを前提に、子ども同士が支え合える学級経営・授業づくりを目指したいという思いがある。

・**人権尊重に関する課題**：非人権的な言葉を口にする児童がまだ見られ、暴言・暴力の根絶が課題。

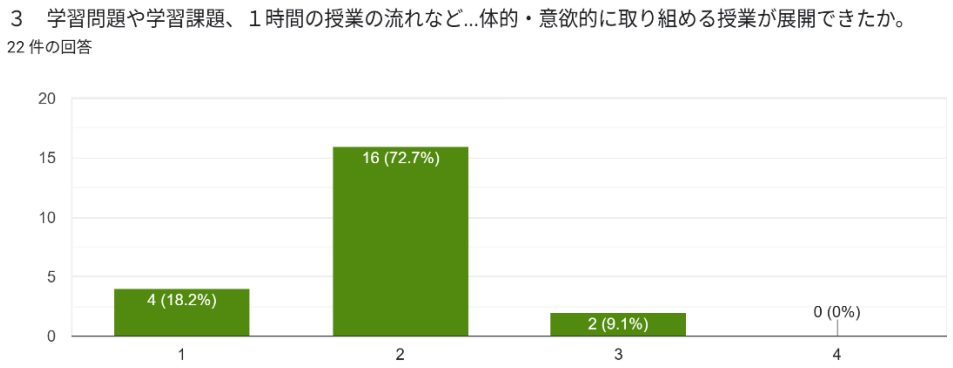


【記述より】

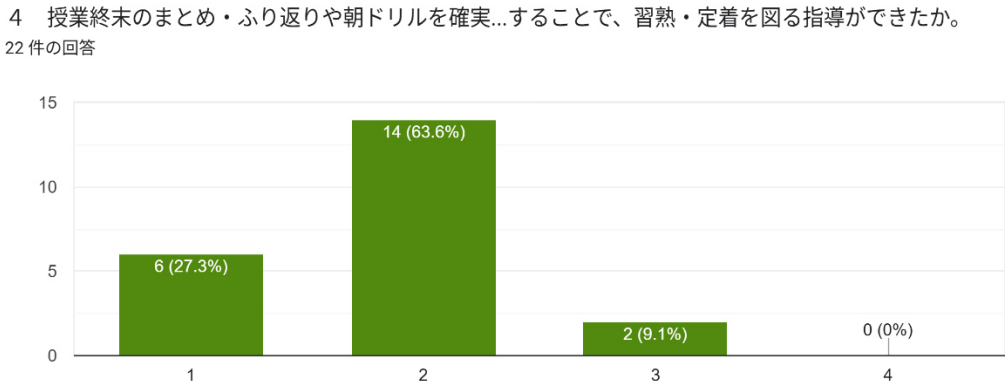
・**自分たちで作り上げる楽しさ**：フラッグダンスなど自分たちで考えて作る活動を通して、達成感や喜びを味わう姿が見られた。

・**運動を楽しむ児童の姿**：ダンス・玉入れ・かけっこ・水泳など、様々な運動を楽しそうに取り組む姿が印象的だった。

・**練習を通した達成感**：組体操など、練習を重ねてできなかった技ができるようになる過程で達成感を実感できた。
・**個に応じた配慮と工夫**：運動が苦手な児童向けのルール簡易化や、初めての活動に抵抗がある子への段階的な参加(見学から)など、個々に合わせた対応を行った。
・**熱心に取り組む姿勢**：運動会に向けて練習に熱心に取り組む姿が見られた。
・**今後の課題**：子どもと一緒に作り上げる過程をより充実させることが課題として残る。



【記述より】
・**学習の流れの明示**：授業の始めに流れを確認したり黒板に明示したりすることで、次に何をするか自分で考えて取り組める児童が増えた。
・**視覚支援による見通し**：視覚的な支援を全員に行いつつ必要な児童には個別対応し、慣れとともに見通しを持って取り組めるようになってきた。
・**学習習慣の定着**：学習課題をノートに取る習慣が身についてきた。
・**教科ごとの学習過程の重視**：問題・実験・観察・結果・考察という学習の流れを大切にしながら活動を進めてきた。
・**めあて・まとめ・ふりかえりの徹底の課題**：めあて・まとめ・ふりかえりを意識した授業を心がけているが、全ての授業では実践できておらず今後の課題。
・**児童主体と教師主導の両立という課題**：児童の発言や反応に応じて授業を柔軟に変える中で、全員に理解や見通しが届いているか、教師主導と児童主体をどう両立するか疑問や課題が残る。



【記述より】
・**家庭学習・反復練習の定着**：教科書内容の練習を宿題に組み込んだり、朝ドリルや学年統一の家庭学習を継続したりすることで、積み重ねが定着してきた。
・**振り返り指導の工夫と段階的な成長**：にこちゃんマークから簡単な言葉での振り返りへと段階的に取り組み、少しずつ自

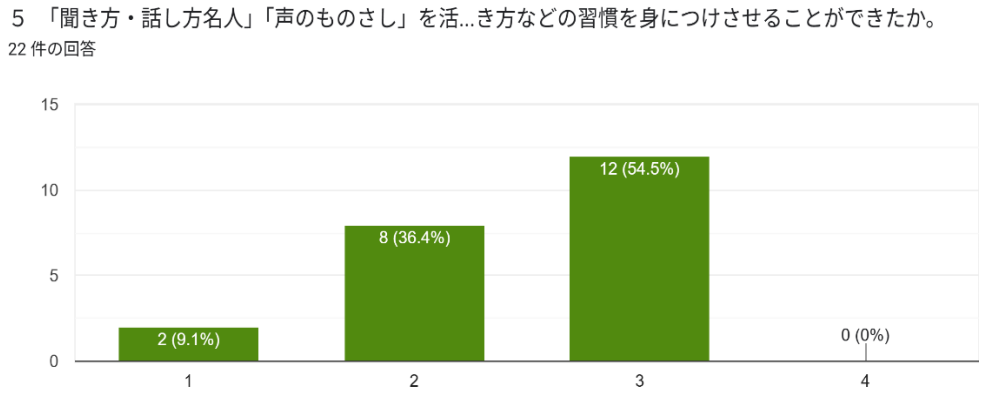
分の言葉で書けるようになってきた。

・**振り返りの深化という課題**：まとめ・振り返りは行っているものの深い学びにはつながっておらず、発表・共有の時間確保も含めて今後の課題。

・**個に応じた教材の工夫**：色付き漢字プリントや個別対応のプリントなど、家庭学習に無理なく取り組めるよう工夫した。

・**既習内容の定着に関する困難**：既習単元の定着が不十分な児童がおり、下学年の内容に遡って宿題を課す一方、学年相応の内容に遅れが生じている。

・**家庭学習の量と児童の負担への配慮**：宿題量が多いと家庭で不安定になる児童もおり、量の調整など負担への配慮を行っている。



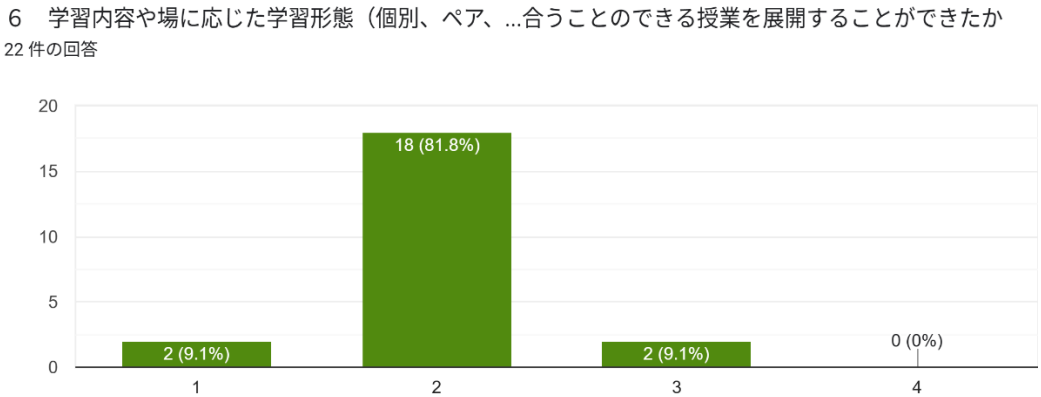
【記述より】

・**「聞くこと」の指導と課題**：聞き方は本校全体の一番の課題であり、最後まで聞く・体を向けるなどを繰り返し指導し、できる子も出てきたが、途中で話し出す児童もまだ多い。

・**話す姿勢・意欲の課題**：相手に伝えようとする意欲や、一人が話す・顔を見て聞くといった基本的な話し方の姿勢がまだ十分に育っておらず、継続的な指導が必要。

・**声の大きさ・自信の課題**：発言や返事の声が小さく自信がない児童が全体を通して見られるが、図書館や発表場面など具体的な場面での指導は進んでいる。

・**指導ツールの活用状況**：「聞き方名人」「声のものさし」など指導ツールは現状活用されておらず、今後の検討課題。

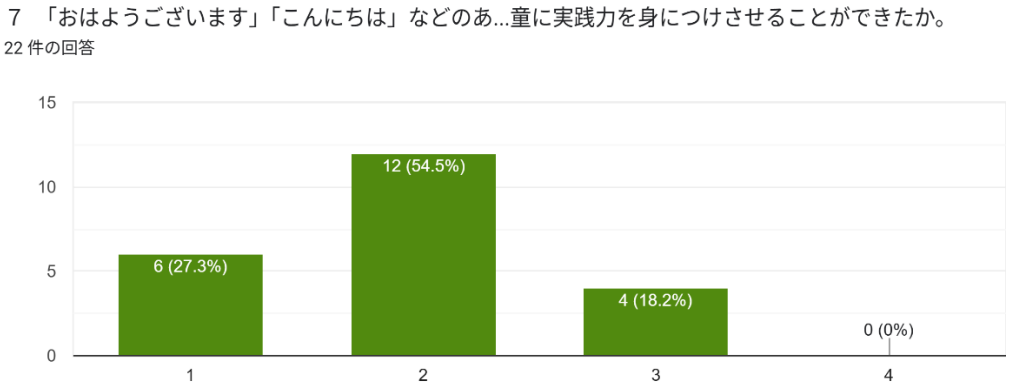


【記述より】

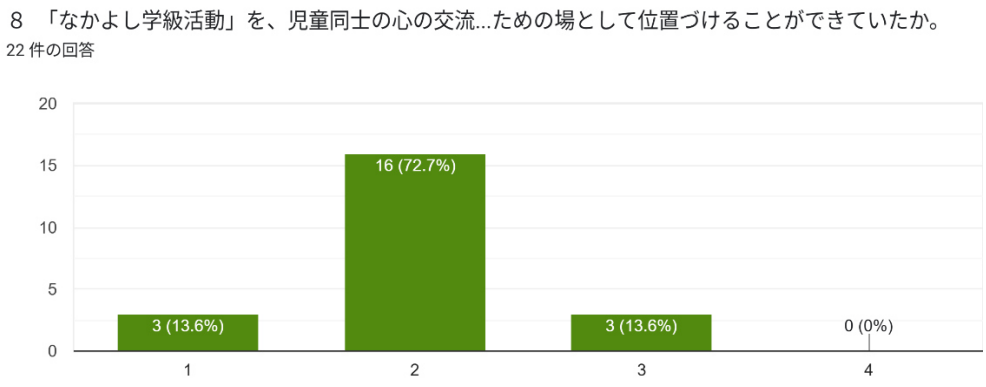
・**グループ・ペア活動の実施と成果**：ダンスやペープサート、観察・実験、道徳の考え共有など様々な場面でペア・グループ活動を取り入れ、子ども同士で意見を出し合う姿が見られた。

・**グループ活動運営上の課題**：中学年ではグループ活動がうまく進まない場面があり、一斉指導の工夫や、話し合い方の見本提示など進め方の改善が必要。

・**主体的な学び合いの深まりという課題**：ペア・グループ学習を取り入れても主体的に学び合う姿は少なく、必要感に応じた導入を今後検討したい。
・**発言に消極的な児童への配慮**：自信がなく発言できない子やおとなしい子が自分の考えを表現しきれておらず、配慮が必要。
・**学習形態を児童が選ぶ主体性の実践**：話し合いたいときは話し合い、個で学びたいときは個別にと、学習形態自体を児童が選択できるようにする取組を行っている。
・**教科特性を生かした自然な導入**：国語などペア・グループ学習が単元に組み込まれている教科では、自然に取り入れることができた。



【記述より】
・**あいさつ運動・指導の取組**：道徳や児童会の挨拶ミッション、課外クラブでの繰り返し指導、教室での挨拶実践など、様々な場面であいさつの大切さを伝えている。
・**あいさつが返ってこない課題**：こちらからあいさつをしても返さない児童が多く、学校全体としての取組が引き続き必要。
・**個人でのあいさつへの照れ・恥ずかしさ**：集団的な取組には意欲的でも、個人であいさつする場面では照れて言えない児童がまだ多い。
・**少しずつの改善の兆し**：クラス内でのあいさつや、朝の挨拶リレーなどを通じて、相手に伝わる声で挨拶できる児童が少しずつ増えてきた。
・**場面による定着度の差**：朝の挨拶は比較的できているが、「こんにちは」など日中の挨拶には課題が残る。
・**指導の優先度に関する声**：あいさつは大きな問題ではなく、他に優先すべき指導があるため特に取り組んでいないという意見もあった。



【記述より】

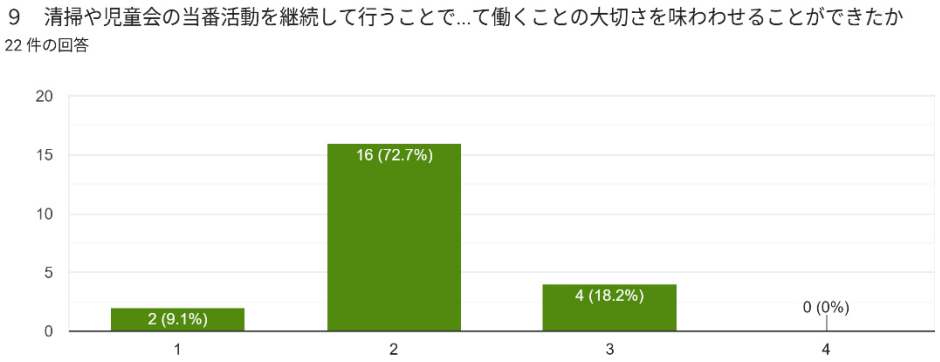
・**異学年交流での思いやりの姿**：ペア学年の上級生が優しく声をかけたり、配慮の必要な子に対応したりする姿が見られた。

・**上級生から学ぶ成長**：掃除やペア給食などで上級生に教わりながら、大きく成長できた面が多い。

・**交流を楽しむ児童の姿**：一緒に遊ぶ・笑うことを通して、居心地の良さを感じられる子や、下級生との関わりを楽しみにしている児童が多い。

・**交流の価値づけ**：活動内容に関わらず、児童同士の心の交流や互いを高め合う場となるよう、教師が価値づける声かけを行っている。

・**清掃や遊びを通じた日常的な交流**：清掃の手伝いや一緒に遊ぶ機会を通じて、異学年での日常的な交流が多く生まれた。



【記述より】

・**協力する良さへの気づき**：清掃で協力すると効率よくきれいにできるという良さを感じ、主体的に取り組めるようになった児童もいる。

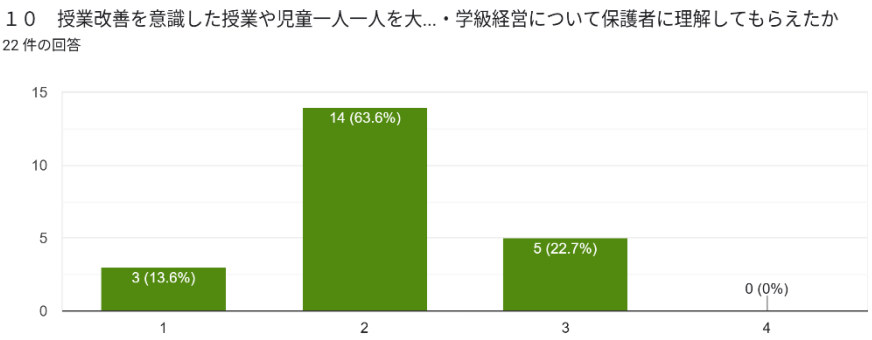
・**当番活動の定着という課題**：当番活動を忘れてしまう児童が少なからずおり、声かけをしても改善しきれず、必要性や責任感を育む指導が課題。

・**主体性の個人差**：言われないと動けない子やそもそも取り組もうとしない子が多く、全員が主体的に取り組めるようにする方策が今後必要。

・**環境の可視化による意欲喚起**：きれいな状態を知らせることで、きれいにしようと頑張る姿が見られた。

・**指導の余力不足**：活動に参加させること自体で手一杯となり、活動の意義を十分に指導できていない現状がある。

・**異学年での学び合い**：6 年生と一緒に清掃することで、下級生が掃除の仕方を学び、感謝の気持ちを持てた。



【記述より】

・**授業改善による児童の変化**：学習内容の確認・聞く姿勢・個別の声かけを意識した授業を通じて、離席せず取り組める姿が増えたという声も懇談会で聞かれた。

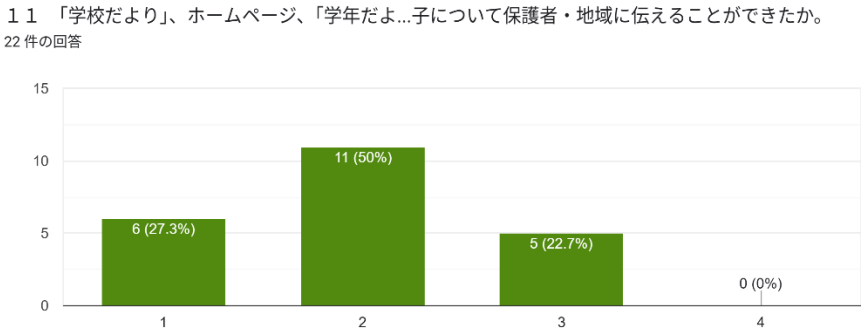
・**個への評価・フィードバックの重視**：一人一人の評価やフィードバックを大切にしたいという思いがある。

・**保護者との温かい関係**：おたよりへの反響など、保護者からの温かい反応に感謝を感じている。

・**保護者との相互理解の難しさ**：学級通信など理解を得るための発信は大切だが、時間的な余裕がなく十分にできていないという課題がある。

・**学級だより発行の課題**：学級だよりを出せていないことを反省点として挙げている職員もいる。

・**個別の要望への対応**：我が子中心の要望が多い保護者に対し、引継ぎ情報を参考にしながら一つ一つ丁寧に対応している。



【記述より】

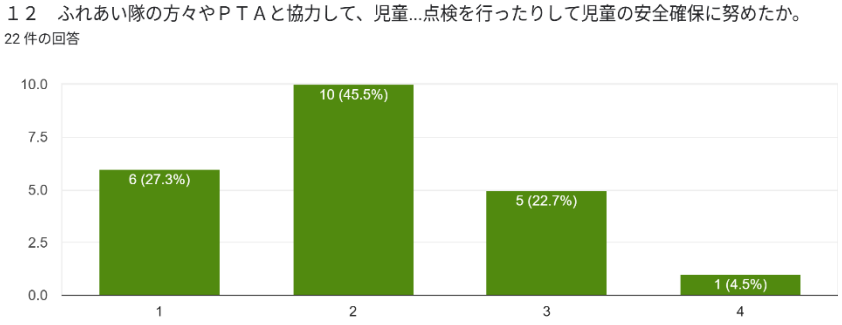
・**定期的な学級・学年だよりの発行**：月 1～2 回や 2 週間に 1 回など、頻度は様々だが学級・学年だよりで様子を伝える取組ができた。

・**写真等を活用した発信**：写真や画像を交えることで伝わりやすくなるため、今後さらに増やしたいという声がある。

・**課外活動の随時紹介**：課外クラブの活動の様子を随時保護者に紹介できた。

・**毎日発行による日々の共有**：毎日発行することで、子どもたちの日々の様子を継続的に共有できた。

・**学級だよりが出せなかった課題**：学級だよりを発行できなかった、または学年だよりのみで学級だよりは出していないという声が複数あった。

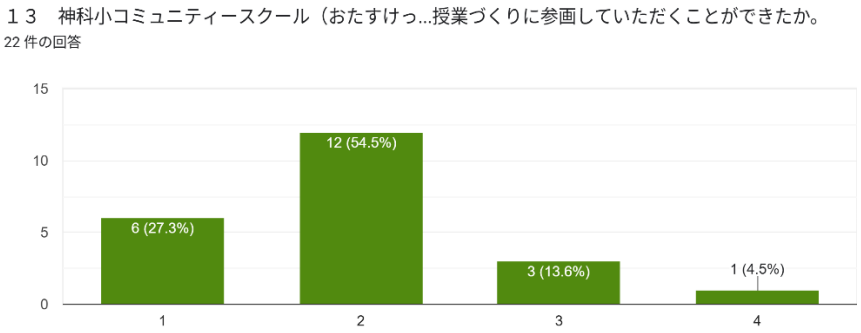


【記述より】

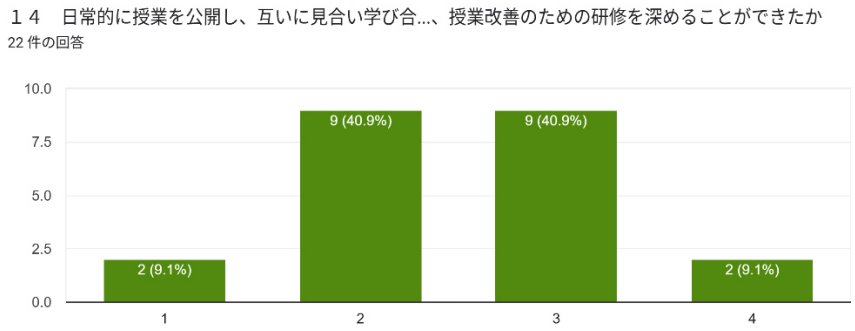
・**実地踏査による現状確認**：実地踏査を通じて担当地区の通学路や危険箇所を、校外指導部や PTA の方と一緒に確認することができた。

・**危険箇所への重点的な対応**：バイパス接続箇所など危険な地点を中心に、街頭指導や保護者との連絡を大切にして対応してきた。

・**PTA との連携**：PTA の方と危険箇所の点検や、集団下校への付き添いを継続的に行うことができた。
・**取組の実施状況にばらつき**：実地踏査以外は特に行っていない、意識した取組があまりできなかったという声もあった。



【記述より】
・**休み時間の交流**：授業での支援はなかったものの、休み時間に子どもたちとたくさん遊んでいただき、児童も楽しみにしている。
・**課外クラブでの日常的な支援**：課外クラブ活動を毎日支援していただき、活動を円滑に進めることができた。
・**行事支援への期待**：２学期の乗り物遠足の引率など、今後多くの行事での支援を予定している。
・**環境整備・行事準備での協力**：教室環境の使い方説明や七夕飾りの準備など、日常のちょっとした場面で協力していただいた。
・**学習活動への協力**：国語の単元でインタビュー活動に協力していただくなど、学習面でも関わりを持てた。
・**感謝の声**：日頃の関わりに対して、児童・教員双方から感謝の気持ちが多く表れている。



【記述より】
・**授業参観の時間確保の難しさ**：授業の進度や学級を空けられない事情から、他クラスの授業をなかなか参観できなかったという声が多い。
・**短時間でも得られた学び**：わずかな時間でも他クラスの話し合いの雰囲気や、他クラスの先生の指導法を見る機会があり参考になった。
・**学年内での情報共有・相談**：授業参観の余裕がない中でも、日々の情報交換を通じて子どもへの対応や授業の進め方を相談し合ってきた。
・**教科担任制による学び合い**：学年で国語・算数の教科担任制を取り入れることが、実質的な学び合いの機会になっている。
・**公開授業への意欲**：自分も授業を公開し学び合いたいという思いはあるが、日程調整の難しさが課題。
・**空き時間を活用した自主的な参観**：空き時間を使って他の先生の授業を覗きに行くなど、自主的に学ぼうとする取組も

見られる。

15 同僚の体罰に関して見聞きしたことがある場合は、その内容をお聞かせください。

なし

16 ご意見等

・**少人数指導の担当授業への関わりの課題**：担当学年の授業に十分入れないことへの申し訳なさや、他学年の先生方の時間を奪わないようにという配慮の声があった。

・**児童情報の共有体制の課題**：気になる段階から早期に情報共有できる仕組みや、教室を離れる児童・支援員が入るクラスの実態など、困り感を全校で周知し合う必要性が挙げられた。

・**日課・時程の見直しの提案**：給食受け取りのため授業時間が実質的に欠けている学級が多く、日課の見直しが必要という意見があった。

・**管理職への感謝**：校長先生の生徒指導への尽力、教頭先生等への丁寧な計画運営への感謝の声があった。

・**授業への臨み方の改善**：児童の授業への向き合い方をどう改善するか、全体で考えていく必要性が挙げられた。

4. 2学期の学校づくりに向けて～子どもたちが願う「楽しい学校」をみんなで考える～

1学期は、児童アンケート・職員自己評価の2つの視点から学校の姿を振り返った。

(1)子どもたちは、どんな学校を願っているのか 【資料1 児童会役員の声】

子どもたちが考える「楽しい学校」は、イベントや行事が多い学校ではない。

- 誰でも安心して過ごせる学校
- 支え合える学校
- 笑顔で過ごせる学校
- 相手を尊重できる学校
- ルールやマナーを守れる学校

子どもたちは、「安心」が土台となり、その上に笑顔や協力が生まれる学校を願っている。

(2)1学期、その願いに近づくことができたのか 【資料2 児童アンケート】

児童アンケートからは、

- 学校は楽しい
- 友達と協力できる
- 安心して過ごせる　と感じている子どもが多く、1学期は安心して過ごせる学校・学級づくりが着実に進んだ。

(3)さらによい学校にするために、私たちは何を大切にするか 【資料3 職員自己評価】

職員自己評価では、2学期に向けた重点として、

- 聞く力・話す力
- 主体性
- 対話を通じた学び合い
- ルールや相手を尊重する姿　　が挙げられた。

(4)ここから見えてきたこと

3つの資料を重ねると、1学期は「安心して過ごせる学校」の土台づくりが着実に進んだことが分かる。

一方で、子どもたちが願う学校をさらに実現していくためには、子ども一人一人が主体となって考え、伝え合い、仲間と学び合う姿を育てていくことが大切である。

5. 2学期の学校づくりに向けて ～「対話を通した学びと課題解決」を目指して～

(1) 2学期に目指す学校の姿

2学期、私たちが目指す学校の姿は、**「対話を通した学びと課題解決」**である。



(2) 目指す姿の根拠

児童会役員の自由記述からは、子どもたちが願う「楽しい学校」とは行事の多さではなく、一人一人が安心して過ごせる学校であることが見えてきた。児童アンケートからも、「学校は楽しい」「友達と協力できる」「安心して過ごせる」と感じている子どもが多く、1 学期はその安心の土台づくりが着実に進んだことが分かっている。

一方、職員自己評価では、2学期に向けた重点として「聞く力・話す力」「主体性」「対話を通じた学び合い」「ルールや相手を尊重する姿」が挙げられた。安心という土台ができつつある今だからこそ、その上に、子ども一人一人が主体となって考え、伝え合い、学び合う姿を育てる段階に進みたい。両者をつなぐ鍵として、2学期は「対話」を位置付けたい。

(3) 「対話」とは何か

対話とは、相手を言い負かすことではなく、互いの思いや考えを理解し合い、ともに納得できる解決を創り出す営みである。単なる「会話」とは異なり、相手の思いを受け止め、違いを認め合いながら新たな考えを共に創り出していくものである。

対話は授業に限らず、学級活動、委員会活動、ペア学年活動、休み時間など学校生活のあらゆる場面に芽がある。意見の違いが生じたとき、暴言や暴力ではなく、互いの思いを伝え合い解決策を見いだすことこそが、よりよい人間関係を築く方法であることを日々の経験の中で実感してほしい。子どもたちが対話による課題解決を経験することは、安心して過ごせる学校づくりの基盤であり、民主的な社会を生きる力を育むことにもつながる。

(4) 2学期、共有したい 3 つの視点

① **場面** ― どの場面で対話を位置付けることができるか　（例：朝の会での一言スピーチ、学級会での合意形成、ペア学年での役割分担の話し合い　等）

② **手立て** ― どのような指導の手立てで対話を深めることができるか　（例：「聞き方名人」「声のものさし」など既存の指導ツールの活用、発言前に隣と話す時間を取る、対立時は「一度受け止めてから話す」型を示す　等）

③ **各学年 ― 発達段階に応じた対話のあり方（以下に例を示す）**

・低学年（1・2 年）：「聞く」「伝える」の基礎を育てる時期。友達の話を最後まで聞く、自分の思いを一言で伝える等、対話の土台づくりを丁寧に行う。

・中学年（3・4 年）：自分と異なる意見があることに気づき、受け止める時期。理由を添えて意見を伝える、友達の意見と比べる等、対話の幅を広げる。

・高学年（5・6 年）：合意形成や役割分担ができる時期。立場の違いを踏まえて折り合いをつける、話し合いを通して集団としての結論を導く等、対話を通した課題解決の力を育てる。

(5) 振り返りの方法

学期末には児童アンケート等で「安心して過ごせているか」「自分の思いを伝えられたか」を確認するとともに、職員間で実践事例を共有し、三学期以降につなげていく。

(6) まとめ

子どもたちが願う「安心して過ごせる学校」を土台に、「会話」から「対話」へと学校文化を育てていく。互いを認め合い、対話を通して学び、課題を解決しながら、自分たちの力でよりよい学校を創っていく学校づくりを、全教職員で進めていきたい。

なお、対話の推進とあわせて、家庭学習の負担や日課、指導時間の確保といった、職員自己評価で挙げられた運営面の課題についても、引き続き学年・校務分掌等で検討を重ねていきたい。